

OPEC減産決定
その真の理由金融アナリスト
永山卓矢

【サウジアラビアによる大幅譲歩】

11月30日に開催された石油輸出国機構(OPEC)総会ではナイジェリアとリビアを除き、各加盟国が応分の減産に応じて生産枠の設定を受け入れる事で、全体の産油量を日量3,250万バレルで抑える事が決まった。

今回の総会を前に、加盟各国や非OPECのロシアも含めて、水面下で活発に交渉が繰り返されたが、事前の報道を見る限り、それが合意に向けて動いているようには見えなかった。

「総論賛成、各論反対」といわれるように、各加盟国は表向き減産の決定に取り組む事を表明しながらも、実際にはイランやイラクが増産を要求して生産枠の設定自体を受け入れない姿勢を示していた中で、それにサウジアラビアが反発していた。そうした状況を見てロシアも合意に参加するのを見送り、OPEC側が減産で合意した場合にのみ協議に応じる姿勢を示していた。

それだけに、減産の決定を受けて市場では強気サプライズと受け止められた。その後、ロシアも原則的にはそれに追従して減産に応じる姿勢を見せたこともあり、原油相場はICEブレント、NY・WTI両市況ともに一気に50ドル台乗せに上伸していったものだ。

今回の合意を巡ってイランとイラクが減産に抵抗したのに対し、サウジは特にイランが減産を受け入れないと自らも減産しないとの姿勢を見せていた。いうまでもなく、その背景にはシーア派大国のイランとスンニ派湾岸諸国の盟主であるサウジとの間での確執があったのはいうまでもない事だ。

ただし、イランは核開発問題で国際社会から制裁を受ける以前に設定されていた日量400万バレルの生産枠を要求していたが、実際には掘削施設が老朽化しており、現在では生産量が現状で可能となる上限付近の同370万バレルに達している。

このため、今回の減産の決定はサウジ側がかなり譲歩した事で実現されたのは明らかである。

【サウジアラビアが譲歩した最大の理由】

サウジがどうして減産に応じたのか。それは、原油価格が低迷していて財政的に苦しい状況にあるからだといわれている。

しかし、OPECが減産して原油相場を多少引き上げても、北米のシェールオイルの生産が増え米国の石油業者が喜ぶだけだ。

あくまでもサウジが今回、減産に応じた真の最大の目的は、国営石油会社サウジアラムコの新規株式公開(IPO)に向けて近く初の財務諸表の開示に取り組んでいる中で、それに適した環境を醸成する事だ。そのためには、原油相場が下がる事で中国はじめ新興国不安や、米国内でもシェール業者をはじめとするハイイールド債の償還問題の高まりから信用不安がもたらされる状況を回避しなければならないからだ。

一方で、米国内でも原油価格が崩落した事で脆弱なシェール企業の整理淘汰が進み、今では採掘コストが20ドル台にまで下がっているところから出てくるほど競争力が強化されている。

世界最大の石油資本であるエクソンモービルも優秀な技術や優良な油田を保有しているシェール企業を傘下に収めているため、そうした米国勢としてもこれから原油相場が上昇していくのは好都合だ。

そもそも、サウジアラムコはかつて、ネルソン・ロックフェラー元副大統領がオーナーだったシェブロン(旧ソーカル)が設立し、後からエクソンやモービルも資本参入していった経緯がある。

最大の石油会社だったエクソンは、現在のシェールやBPといった欧州ロスチャイルド系石油資本とともに、1923年7月末にメソポタミア(現在のイラク)での原油生産の寡占化を取り決めた「赤線協定」が足かせとなって新規油田開発ができなかったのを尻目に、旧ソーカルがサウジアラビア王家と結びついてアラビア半島の油田の権益を握ってきた。

ネルソン・ロックフェラー元副大統領の「後見人」だったダレス、その後継者であるキッシンジャー両元国務長官に代表されるように、旧スタンダード石油の「本流」であるエクソンを差し置いて、「傍流」の旧ソーカルが第二次世界大戦後、世界覇権国である米国の政財界で長期にわたり主導権を握ってきたのはこのためだ。

しかし、現在ではデイヴィッド・ロックフェラー氏の系列が完全に米国内では圧倒的な勢力を握っており、石油業界でも同氏がオーナーであるエクソンモービルが圧倒的な地位を占めている。

それとともに、サウジアラムコもかつてのシェブロンから、現在では実質的にエクソンモービルとの一体化が進んでいる。

米国では自国内のシェール産業の生産活動をさらに活発化させようとしており、実際にトランプ次期大統領も支持基盤であるエクソンモービルをはじめ石油業界に配慮して、環境面その他の規制緩和を推し進めてそれを後押ししようとしている。

さらに、トランプ次期政権下で米国の経常赤字が大きく膨れ上がるのが確実視されている中で、将来的にはアラスカでの油田開発や輸出への取り組みも視野に入っている状態だ。

こうした状況のなかで、サウジとしては世界での石油市場のシェアが相対的に低下していくのが避けられない。

そこでムハンマド副皇太子が米国の後押しを受けて、過度に石油産業に依存した経済構造からの脱却に向けて産業構造の高度化に取り組んでいるのは、巷間で知られている通りだ。

サウジアラムコのIPOも、そうした米国の支援を受けたサウジ政府の経済構造改革の一環として行われようとしているものだ。

そのIPOに向けたアドバイザーとして、エクソンモービルと同系列の世界最大の金融資本であるシティ・グループ直系の金融コンサルタントであるクライン氏がついている。そこでは、いかにトランプ次期大統領を操縦しているとはいえ、異なる系列であるゴールドマン・サックスの人脈が入る事はできないようだ。

【原油相場引き上げのもう一つの理由】

また米国としては、FRBの利上げ路線を軌道に乗せようとしている事も、原油相場を押し上げる事で安定的な株高傾向を継続させようとしているもう一つの大きな要因だ。

トランプ次期政権は、既に大規模な減税政策や公共インフラ事業による財政出動政策を打ち出している。

それだけでなく、さらにイスラエルやサウジを防衛するために中東に積極的に関与する一方で、アジアでも今回、79年の国交断絶以来初めてとされる台湾の蔡英文総統と電話協議をしたように、中国への強硬路線を強めて国防費を大幅に増額しようとしている。

それにより、財政収支と経常収支の「双子の赤字」が膨れ上がるのが確実視され、インフレ観測が高まっている事から、FRBが利上げ推進路線を軌道に乗せていこうとしている。

それが遅れば住宅価格が一段と高騰し、金融機関のバランスシートが膨らんで財務内容が不健全な状態になってしまい、そこにインフレ観測から長期金利が上昇すると致命的な打撃を受けかねない。

そのため、できる限り早期に利上げを軌道に乗せたいと思っているわけだ。

なお、今回のOPECの合意を受けて最も助かったのが、いつ債務不履行(デフォルト)に陥っておかしくなかったベネズエラだ。それはすなわち、同国に簿外で巨額な貸し付けをしてきた中国が助かった事を意味する。

実際、今年3月には米国で財務内容が脆弱なシェール企業の社債の償還問題が高まったが、その最大の焦点が同国の国営石油会社(PDVS A)が米国で発行した社債の償還に伴うデフォルト不安が高まった事によるものだった。それにより、連鎖的にGDPで世界第2位の経済大国が崩壊する危険性すら高まったからだ。

永山卓矢の「マスコミが触れない国際金融経済情勢の真実」

詳しくはこちらへ → <http://17894176.blog.fc2.com/>

ザ・テクニカル

次なる高値に

日経平均株価の上下動のリズムは早い。先週は弱気アイルランドリバーサルが出現したことで、目先の高値を暗示していると述べたが、5日18,227まで下げた後、急反転。8日はギャップアップして、18,765と高値を更新。ただ、シナリオ的には2014年10月末の事例を挙げたが、これはそのまま踏襲。即ち、「4営業日の僅かな調整を入れて再び反騰、1か月後に18,000円に達した。安値（当時の1年サイクルボトム）から8週間ではぼ3,500円幅を上げたことになる。このロケットスタートが今回の起点（11月9日）から始まっているとすれば、その8週間後、即ち来年1月第1週には19,600円程度にはなっているだろう。また当時（14年末）の上昇率（24%）で見れば、今回、約2万円となる」と述べた。

中期的なシナリオは強気のまま。短期の調整を4営業日程度と読んでいたが、2営業日で終了、その後の足取りは先週述べた通り。「……再び上昇基調を辿ると見る。少なくとも8週以上の上昇を見込んでいることから、“年末年始2万円”は妥当なレベル」。

今週の必押し

ユーロドルは依然売り

当欄では以前から“…昨年3月からの相場は38週、29週で安値が出現している事を鑑みて、節目となる安値は本年末から来年始めに出現すると見る。…相場は少なくとも1.045、もしくはパリティ（1：1）になると予測。買い参入はそこまで待ちたい。なお、売りの損切りはリスク許容度に応じて1.0950か1.115以上の引け値に置きたい”の記述に則ってユーロドル相場の売り方針を推奨。ただ先週は“日足では15日スローストキャスティクスと強気ダイバージェンスの関係。チャネルラインの第一下限がサポートとなり、先週末の引け値で第二下限も突破。恐らく今週23日移動平均までの戻りがあるだろう”と予測するも「戻り売り一貫」として戻り場面での売りを推奨。その目安として①は3月安値ラインの水準、②は6月安値ラインの水準、そして③は69日移動平均の水準を設定。その上で先週は“日柄は、6月安値から今週が24週目。11月安値（22週目）が日柄不足で下がるなら、戻りは通常①程度。FOMC

これに向けて進んでいる。警戒すべきはFOMCでの金利上げ。相場は先に織り込むというが、利上げは1ヶ月前から既に100%織り込んでいる。昨年も同様、12月16日の利上げ実施1ヶ月前には100%織り込んでいた。従って発表時は上伸したものの、その後2日間、3.7%ほど下落した。そして29日に向けて再度上昇も利上げ時につけた高値を取れなかった。その後は年初の急落へと繋がり、1～2月に15,500ドル割れとなった。これは年末最後の戻り高値から12%の調整となった。

12月利上げを前提とした流れは同じだが、ダウ平均は現在史上最高値を更新中。昨年は年初から中国株が急落した影響を受けたと考えられる。このとき、日経平均の下げはかなり深刻であった。15年12月に戻り高値をつけた後、2月安値まで5,000円以上の急落。25%強の下げ率となった。

結局中国市場の影響がかなり大きかったと言える。今回は2年続けて同じになるとは思わない。中国市場も落ち着いている。

FOMC後は株式市場、一時的にダウが下落しても無難に消化して、その後回復、高値更新が続くと見る。日経平均は年末年始2万円前後の可能性はあると見ている。但し、12月5日安値更新は警戒しておく。

で過度に上げても②。先週短期買いを仕掛けていれば、今週から来週にかけ①～②付近での利食いドテンが望ましい”とした。

12月5日、イタリアの国民投票の結果を受けて相場は1.0504まで下落するも、そこから急反発。BREXITやトランプショックの時のような長いヒゲを蓄えたローソク足を付け、8日のECB会合で①と②の中間まで上昇。そこから急反落して再度チャネルライン下限まで下落している。従って利食いドテン売りが出来ている。恐らくまだまだ下げていくのではないかな。

今週は6月安値から25週目なので、前回の節目であった29週、その前の38週と比べてもまだ日柄が若い。先週5日安値を割り込むか1.06でもたつつか、大きく戻しても①が限界だろう。

なお、先週安値が更新され黄金分割の価格が変わった。11月9日（1.1299）から12月5日（1.0504）までの下げ幅は0.795。38%訂正水準は1.0808±0.0036で未だ①付近、50%訂正水準は1.0902±0.0047でこれも未だ②付近、62%訂正水準は1.0995±0.0058なので、これも③の69日移動平均水準に相当する。

水星逆行開始日（12月19日）1週間前からのFOMC（12月13～14日）で相場はどう荒れるかを見極めたい。

今週の主な予定・経済統計

12月13日（火）

- ・米3年債入札（240億ドル）
- ・米10年債入札（200億ドル）
- ・米連邦公開市場委員会（FOMC：14日まで）

12月14日（水）…満月

- ・2016年第4四半期の日銀短観
- ・12月の米小売売上高（前月比0.3%の上昇予想、前月は0.8%上昇）
- ・12月の米卸売物価指数（前月比0.1%の上昇予想、前月は横ばい）
- ・同コア指数（前月比0.2%の上昇予想、前月は0.2%減少）
- ・米30年債入札（120億ドル：入札合計は560億ドル規模）
- ・イエレンFRB議長記者会見
- ・FOMC政策金利発表
- ・11月の米鉱工業生産指数（前月比0.2%減少の予想、前回は横ばい）
- ・11月の米設備稼働率（75.1%の予想、前月は75.3%）

12月15日（木）

- ・12月のNY連銀景況指数（3.00の市場予想、前月は1.5）
- ・12月のフィラデルフィア連銀景況指数（9.0の予想、前月は7.6）
- ・12月の米消費者物価指数（前月比0.2%の上昇予想、前月は0.4%上昇）
- ・同コア指数（前月比0.2%の上昇予想、前月は0.1%上昇）
- ・米週間新規失業保険申請件数（前週は25.8万件）
- ・EU首脳会議
- ・日露首脳会談

12月16日（金）

- ・11月の米住宅着工件数（123.6万戸の予想、前月は126万戸）
- ・日露首脳会談
- ・リッチモンド連銀総裁、講演



今週の相場風林語録

三割高下は一応向かえ（2）

輸出も輸入もないわけで、せいぜい前年の繰り越しが多いか少ないかぐらいが米相場の材料である。現代はものによっては十分の一になったり、三十倍～五十倍にも変動する時代であるから、単に参考として考える。

今週の**九星★波動**

南雲 紫蘭

その相場、
薄商いにつき

米雇用統計の数字は控えめに見えも決して悪いものではありませんでした。12月利上げが確実と考えられても、相場はむしろ軟調になってきたのはやはり12月を迎えてリスクを落とす、利益は確定しておくという投資家の心理が影響していると存じます。結局乱高下するのは結局政治ネタ…、つまりイタリアの国民投票の結果政治混乱が招かれる…というのですが、それも一日で元の木阿弥に。相場参加者が減る中、政治ネタは解釈次第でどうにでもなってしまう、つまり振らされる相場展開に要注意ということになります。

誰もがスピード違反と考えているドル円相場、あるいは株式市場ですが、急落には常に買いで待っている人がいるのも事実。誰もが買ってしまった幸福感も漂ってはいません。ということは目先波乱はあっても、最終的には上昇する相場ということなのでしょう。それに、なんといってもトランプフォーリアとも

相場指南道場

トレーダーあすなろ物語 (374)

中原 駿

不承不承も上野が向かおうとしていたオフィスは、神宮外苑のイチョウ並木のすぐ脇にあった。

通いなれたはずの入口も、門の守衛も、妙によそよそしく感じた。

いや、気のせいなのだろう。

それにしても、建物も東京の景色も全く変わっていないはずなのにこんなに疎外感を感じてしまうのは、やはり上野の心がささくれ立っているからなのか。

人間、滅多に言えない秘密があると、

何もかも疑心暗鬼になってしまうものなのかもしれない。

入口でぼおっとしていると、肩を強めに叩かれた。

第六感の 第三の山形成後の難問



テクニカルアナリスト 葛城 北斗

釣瓶落としか更なるピークをとるか

これまでの見方「ドル円相場は乱高下期に突入。5年サイクルが上昇期に入っているなら、この高下も中段の調整に過ぎない。1年後、後から見て安い値位置であったと判る。昨年の高値から今年の安値までの61.8%戻しが115.57。今年の到達点としては良いレベルで115～116円レベルは昨年の重要なサポートであった。今度は上値抵抗になるだろう」。変更なし。

週明けはイタリアの国民投票で2円幅の乱高下があったものの、週後半に向けレンジを固める相場となった。このフォーメーションは12月1日以降、時間足ではレクタングル。上値114.70±0.20、下値113.00±0.20。レンジ上抜けは予てからの小さな目標値115円台。

ただし、先週も述べた如く「波動は日足ベースで高値と安値が切り上がる小刻みな上下運動。ややウェッジ系ともいえる」。

小刻み運動は三つ目の山を暗示しており、二つ目の谷である12月5日安値112.86を下抜けない限り、12月1日高値更新は時間の問題。

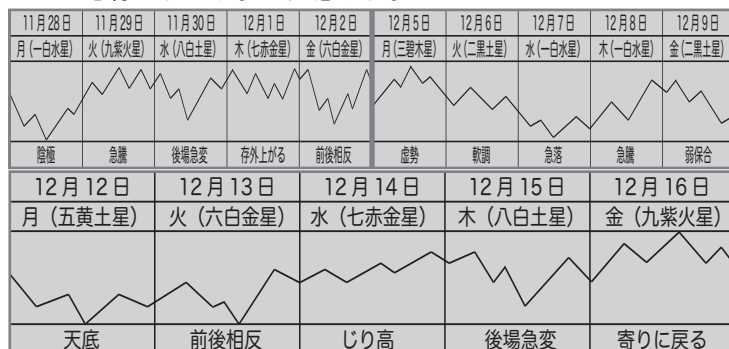
さてこの先、問題は難問に切り替わる。先週述べたシナリオは継続されよう。即ち、「この上下動が前述した高値安値切り上がり型であれば、そのウェッジ終了後はもう一段、上伸する場面が到来すると思う。この形態は前の安値が更新されると調整が深くなる。現段階では11月28日の111.36が安値がサポート。維持されて反騰し高値を更新すれば115.00±0.22までは

いうべき「期待感」だけの相場は「期待実現度」があまりにも未知数なるがゆえに相場の天井が全く見えない、とも言えます。

九星波動の月盤は7日から《一白水星》に入っています。

いわゆる「陰極」ですが、月盤は基本逆転していますから、これは「天井波乱」。今のところ想定通りの展開ではあります。

ただし、クリスマス前後からは手出し無用の薄い相場となることが想像されます。ご注意あれ。



「よっ、どした。久しぶりなのにずいぶんしょげているな」。

牧山だった。

パツとしない上野の上司で、いつも目の奥が笑っていない。優しい口調にいつも影があり、言葉に猜疑心が溢れる。

上野が最も警戒しなくてはいけない人間の一人であった。

こんなところで、放心している自分を見られてはいけない。

上野はとつさに元気に声を出した。

「いやあ、久しぶりに夜行に乗ったらもう疲れてしまいました。もう飛行機の夜行はだめかもしれません」。

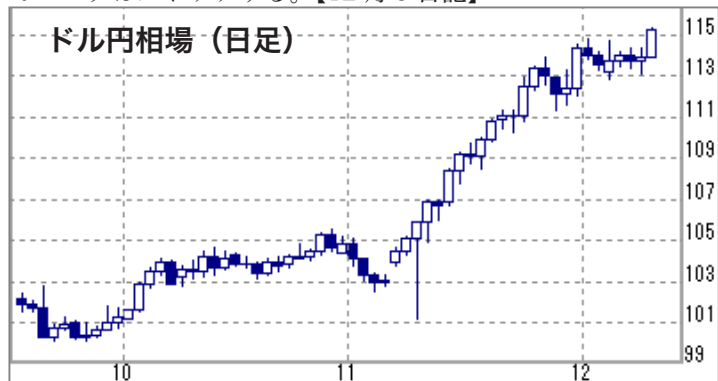
「何言っているんだ、シンガポールの後にはニューヨークやロンドンも待っているし。まだ若いのにそんなことを言っているのはだめだ」。

あまりにもわかりやすい牧山の言葉には心底がっかりしたが、この程度に考えてくれるならば御しやすい。

会議に向けて少し自信がついたような気がした。

許容範囲」。前の安値は12月5日の安値に切り替わる。そして高値更新は115円オーバーになるが、その後、直ちに修正が入れば、3つ目の谷形成へと繋がる。難問はこの谷が二つ目の谷を下回らなければ、次は3～5日のストレートの続伸につながり、116～118円を短期間でやりに行く。ところがその前に二つ目の谷を下抜けると、ウェッジの基点111円台へと転げ落ちるのも早い。

さて難問だ。今週のビッグイベントは13～14日のFOMC。利上げは100%織り込み済み。材料出尽くしの動きが到来すれば、ドル売りへと舵を切る。これが急落に繋がる恐れがあり、113円を割り込むと、111～110円台への仕切りなおし。ただ、中期のトレンドとしては40日移動平均(現在108.40前後)を引け値で下回らない限り、短期サイクルの上昇トレンドは継続されよう。現段階では115円以上で利食いを狙い、111～112円台あれば、買い拾っておく。110円割れの引け値は短期のロングはストップする。【12月9日記】



サイクルだけ話します。

— メリマン・サイクル理論 備忘録 —

【第19回】NY金のサイクルについて (2)

前回『フォーキャスト 2017』に掲載されるNY金の超長期サイクルが25年(300カ月)から23.5年(282カ月)に短縮されたという話をしましたが、サイクルの構造自体は変わっていません。大きなサイクルはほぼ大半がサブサイクルによって2分割されるか、3分割されるかのどちらかになります。

今回のフォーキャストによると、1976年以降この相場にはおよそ86～102カ月のレンジで節目を付けるサイクルが存在。それが7.83年(94カ月±8カ月)サイクルです。上記超長期サイクルは3つの7.83年サイクルで構成され、第一サイクルは1999年8月25日から110カ月後の2008年10月24日にボトムをつけました。そこから86カ月後が2015年12月3日の安値です。もしここが第二サイクルのボトムであれば、現在は第三サイクル。サイクルの序盤は強気ですが、長期サイクルの最終サイクルなので終盤に大底中の大底がやって来ます。

メリマン通信 — 金融アストロロジーへの誘い —

日経平均株価と水星逆行開始1週間前と

当欄では以前からこう述べている“…12月26日前後が怪しい。12月27日(米国時間12月26日)3時半ごろ、木星と天王星はオポジション(180度)の関係になる。その2日前の25日に土星と天王星、金星と木星はそれぞれトライン(120度)の関係に。トラインは惑星間が良好な関係である事を示すソフトアスペクトと呼ばれる天体位相。良好転じて上昇のピーク、即ち天井と関連性が高い。これは株式や米ドルにはポジティブ、金やユーロドルにはネガティブに働くものと考え。更にこの時間帯は12月19日～2017年1月8日まで発生する水星逆行の中間点(12月28～29日)。筆者はこのエリアで大きな相場の節目が出現するものと予測する”。どうやらこの動きが日経平均株価で現実のものとなりそうだ。

分析ツールとしてのアストロロジーの弱点はタイミングは計

これに対し、この相場にはもう一つの見方が存在します。それは、他の相場と同様に金も23.5年ではなく18カ月前後のサイクルが存在するというもの。これは非常に強気な見立てです。

先ほど99～08年までの110カ月サイクルの話をしましたが、これを18年サイクルの9年ハーフサイクル(108±18カ月)と考えます。次の86カ月は4カ月日柄が足りないのですが、サイクルが歪んで短縮されたと考えると解釈する事が出来ます。

今回は更に細かくサイクルを検証しますが、来年中に15年12月安値を割れるようなら23.5年サイクル、上昇基調が続くなら18年サイクル入りしている可能性もあると考えて下さい。



れても、天底の判断が出来ない事。日経平均の長期相場サイクルの天底は、前後のシャドウ期(通常よりも運行速度が遅くなる時間帯)も含めた水星逆行発生場面をつける事が多い。筆者は以前、日経平均がここに向けて大下げすると見ていた。しかし大上げしているところを見る限り、これは逆パターンと見る。

総じて水星逆行期の相場はノコギリの刃のようなジグザグ相場(ウィップソー)になるか、加速して一本調子に進むか、逆行中間点で腰折れして転換するパターンに分かれる(どのパターンになるか判りにくいので“利食いを早く”になるのだが)。今回の水星逆行中間点付近には、相場の天井と関連しやすいトラインが関係しており、この天体位相の一角を“ハブニング”の星である天王星が担っていることから、この相場は逆行開始日1週間前や開始当日付近で急落しても、中間点に向けて上昇するものと予測。よって目先の押し目は買いと見る。逆に、今週頭に相場が急伸しているようなら、懐きつつも順張りの姿勢で臨んだ方が得策ではないかと筆者は考える。

WEBサイトより一足早く、1週間分まとめ読み！！

今週のアストロロジー info

- 12月12日(月) 金融市場は楽観的な動き
- 12月13日(火) 昨日上昇の市場は本日も継続
- 12月14日(水) 満月 暴発気味の相場
- 12月15日(木) オーバーシュートすれば転換近い
- 12月16日(金) 行き過ぎをとがめる動き
- 12月17日(土) 相場はエネルギーの蓄積と放出で最後は元の本阿弥
- 12月18日(日) 上げが一斉にあれば相場終焉近し

星を読む。サイクルを読む。市場を読む。
Feel the star. Feel the cycle. Feel the market.

フォーキャスト 2017

アストロロジーとサイクルで
2017年の相場を読み解く究極の書

「サイクル」「アストロロジー(占星学)」「テクニカル」
この3本柱で2017年の動向を予測！

アストロロジーでは2017年の水星および金星逆行の解説に加え、有力政治家の出生図やFRB、NYSE、そして米国の始原図から予測。主要天体位相の発生時間と始原図とを重ね「何故この時期は重要なのか」を解明。「フォーキャスト2016」目玉解説の土星・海王星ウェニングスクエアは終了したが、その影響は2017年中もまだ残る。メリマン氏はこの点を「世界無責任時代(ただし、もれなくスケープゴート付き)」という副題をつけて「土星はコントロール、統御を意味する。特に、政府や金融界のリーダー達のように権力の座にある人々が持つ、統御への欲求・衝動を象徴。しかし海王星は境界など知らないし、とりわけ境界線、限界、統御という意識が欠落している。…状況が制御不能となりヒステリー状態になっていくという一連の反応は、何も中央銀行とインフレーションの問題に限ったことではない」と述べていた。2016年に起きた事象は「制御不能」と「無責任」という言葉は非常に的確だった。

恐らくこのスクエアの解説も行いつつ、次の一手が予測されるのではないだろうか。

幾つかの主要相場では長期相場サイクルの節目に入っており、アストロロジーとサイクル、どちらでも必読の内容となるだろう。

レイモンド・メリマン 著 秋山日揮香・投資日報編集部 訳
投資日報出版発行 8100円(税込・送料別)

12月26日発売予定 予約受付中！

簡単・便利な「投資日報オンラインショッピング」もご利用ください。

お問合わせ
お申込みは：投資日報出版(株) <http://www.toushinippou.co.jp/>

〒103-0013 東京都中央区日本橋人形町 3-12-11GRANDE 人形町 6F 電話：03-3669-0278 FAX：03-3668-4444

2017年最初の勉強会！ 参加申し込み受付中！

2017年 新春 勉強会

フォーキャストのその先へ

勉強会の新年第一回目は、『フォーキャスト2017』を参照しながら、株式市場、通貨市場、国際商品市場の中から「どの銘柄を、どのタイミングで、どこで、どのように儲けて行くか」という問題を、サイクル・アストロロジー・テクニカルの3本柱で分析。鎬木自身の見解も織り交ぜながら、午前・午後の二部構成で解説します！講演後はご質問にも出来る限りお答えします！

講師	株式会社投資日報社 代表取締役 鎬木 高明	定員	50名 (定員に達し次第受付終了)
会場	貸会議室日本橋清新丹 東京都中央区日本橋人形町1-4-10 人形町センタービル2階	参加費	14,040円(税込) ※お申込み手数料等はお客様負担となります。
日時	2017年1月28日(土) 11:00～15:00 ※途中昼食休憩あり(お弁当をご用意しております)		

■ 詳細・お申し込みは >> <http://www.toushinippou.co.jp/> (セミナー)より申し込みください

(株) 投資日報社 電話：03-3669-0278 東京都中央区日本橋人形町3-12-11GRANDE 人形町6階